

第 271 回新潟外科集談会

日 時 平成 23 年 5 月 14 日 (土)
午後 1 時 30 分～午後 3 時 22 分
会 場 新潟大学医学部 有壬記念館

2 酸性物質による腐食性胃炎後の噴門・幽門狭窄
に対して鏡視下胃全摘を施行した 1 例

田中 亮・矢島 和人・加納 陽介
角田 知行・市川 寛・石川 卓
小杉 伸一・神田 達夫・畠山 勝義
西倉 健*

新潟大学大学院 消化器・一般外科学分野
同 分子・診断/分子・病態病理学分野*

一 般 演 題

1 医原性食道損傷に対し二期的に食道バイパスを
施行した 1 例

堀田真之介・小杉 伸一・神田 達夫
石川 卓・矢島 和人・畠山 勝義
桑原 史郎*

新潟大学大学院 消化器・一般外科学分野
新潟市民病院 消化器外科*

症例は 50 歳，女性。2011 年 7 月，前医整形外科にて，後縦韌帯骨化症に対し頸椎前方固定術を施行された。術後，頸部膿瘍を併発し，第 2 病日にドレナージ術を施行された。術中所見にて食道損傷が判明し直接縫合したが，膿瘍腔が拡大したため第 12 病日に同院外科にて食道外瘻，胃瘻造設術を施行された。以後，膿瘍はコントロールされた。第 84 病日に整形外科にて頸椎後方固定術施行され，以後頸椎病変には大きな問題を認めなかった。その後，食道再建術目的に当科紹介され，第 254 病日に手術を施行した。前回の頸部膿瘍は上縦隔にまで及んでおり，遠位側食道断端の処理は困難と判断し，Y 字胃管による食道バイパス術，腸瘻造設術を施行した。術後経過は概ね良好で第 34 病日に軽快退院した。

【結語】頸椎前方固定術後の食道損傷に対し，Y 字胃管による食道バイパス術を施行し，良好な結果を得られた 1 例を経験したので，文献的考察を加えて報告する。

腐食性胃炎は酸やアルカリなど組織障害性の強い腐食剤の飲用により生じる。急性期では穿孔・腹膜炎，大量出血時に緊急手術の適応となり，慢性期では瘢痕による通過障害が手術適応となりうる。腐食性胃炎後に噴門・幽門狭窄を来し，鏡視下胃全摘術を施行した症例を報告する。

症例は 75 歳，女性。自殺目的にトイレ用洗浄剤を飲用し救急搬送された。保存的治療が行われたが，2 ヶ月後に幽門および噴門の狭窄が出現し，3 ヶ月後には幽門の完全狭窄を来したため手術を選択した。5 ポート，気腹法，5 cm の小切開にて腹腔鏡補助下胃全摘，Roux-en Y 再建を行った。術後経過良好で，第 27 病日に精神科病院に転院した。腐食性胃炎による通過障害は通常，幽門中心であるが本症例の様に胃全摘が必要となることもある。鏡視下手術は良性疾患の技術を悪性疾患へ発展させていったが，悪性疾患の技術を良性疾患に対して還元できた貴重な 1 例である。

3 集学的治療が奏効した，大動脈周囲リンパ節
転移陽性進行胃癌の 1 例

下田 傑・角南 栄二・黒崎 功*
畠山 勝義*

白根健生病院 外科
新潟大学大学院 消化器・一般外科学分野*

症例は 78 才，男性。

【現病歴】胃体中部 2 型進行胃癌，大動脈周囲リンパ節転移にて 2009 年 4 月より TS-1/CDDP を 3 コース施行した。原発巣の縮小および大動脈周囲リンパ節の画像上消失したため，同 7 月胃全

摘、脾臓合併切除、D2郭清、大動脈周囲リンパ節サンプリングを施行した。病理組織診断にて根治術と診断され、組織学的効果は grade I b と判定された。術後さらに TS-1/CDDP を4コース継続したが、術後8ヶ月にて大動脈周囲リンパ節再発をきたし2010年3月大動脈周囲リンパ節郭清を施行した。病理診断では胃癌の転移であった。その後も TS-1/Paclitaxel, TS-1/CPT-11 を継続、現在多発肺・肝転移を認めながら治療開始後2年生存中である。

4 小腸内視鏡で診断した小腸癌の1例

齋藤 敬太・石塚 大・植木 匡
多々 孝・若桑 隆二・五十川 修*
丸山 正樹*・佐藤 俊大*

厚生連刈羽郡総合病院 外科
同 内科*

症例は63歳、男性。平成22年9月上旬より左上腹部痛と便秘あり。便潜血陽性のため上部消化管内視鏡と大腸内視鏡を行ったが、異常はなかった。CTにて左上腹部に腫瘍性病変と小腸間膜リンパ節腫大・傍大動脈リンパ節腫大を認めた。小腸原発と考へて小腸内視鏡を施行したところ、Triez 韌帯より肛門側に60-70cmのところに2型腫瘍を認め、生検で tub1 であった。平成22年11月に手術施行し、小腸部分切除・傍大動脈リンパ節郭清を行った。切除標本の病理所見は tub2, SS, INF β , ly1, v0, LN 6/8 で、pT3N1M1 f-stage IV であった。経過は良好にて術後14病日で退院となった。現在、術後補助化学療法として TS-1 120mg/day を2投1休で4コース目である。術後4ヶ月現在、再発を認めない。

5 腹腔鏡下虫垂切除術における吸引式ドレーンの有用性

荒井 勇樹・窪田 正幸・奥山 直樹
小林久美子・塚田 真実・仲谷 健吾
大山 俊之

新潟大学大学院 小児外科学分野

【背景】虫垂切除は腹腔鏡手術の良い適応であるが、ペンローズドレーン(PD)では術後膿瘍形成例を予防できず吸引式ドレーン(吸引D)に変更した。その有用性を検討した。

【症例と方法】症例は過去10年間に虫垂切除術を施行した68例である。

【結果】68例中ドレーン留置は30例で、PDは27例(開腹12,鏡視下15),吸引Dは3例(開腹1,鏡視下2)であった。術後膿瘍形成のため再ドレナージ術となったのは6例で全例PD例(開腹1,鏡視下5)であった。初回ドレナージのみは4例[PD3(開腹1,鏡視下2),吸引D1(開腹)]で、再手術となったのはPD2例(開腹1,鏡視下1)であった。

【結語】鏡視下手術でのPD留置例は術後膿瘍発生率が高く、吸引Dは膿瘍形成予防に有用と考へられた。

6 当科における小児胆石症15例の検討

飯田 久貴・飯沼 泰史・平山 裕
橋詰 直樹・新田 幸壽

新潟市民病院 小児外科

小児胆石症(以下本症)は比較的まれな疾患である。当科で経験した本症15例に対し、それらの臨床的特徴を後方視的に検討した。年齢は1-17歳まで平均8.4歳で性差なく、胆石の発見契機は腹痛が8例と最多で、自覚症状を伴わない偶発的発見例も5例あった。

13例が腹部エコー、腹部単純X線のいずれかで診断されていた。また、開腹手術術後が4例、遺伝性球状赤血球症が3例と基礎疾患を有する例が多く、特発例は2例のみであった。結石は炭